上越教育大学研究紀要　第20巻　第2号　平成13年3月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 20, No. 2, Mar. 2001

日本人中学生・高校生の英語語彙学習方略
—学習経験年数と性差の影響—

平　野　絹　枝*・赤　松　信　彦**・姉　崎　達　夫***

(平成12年11月30日受理)

要　　旨

本研究の目的は1）日本人中学生と高校生が英語の語彙を学習する時に用いる語彙学習方略に対する意識（認識）の特徴はどのようなものか，及び2）英語学習経験年数の違いと性差が語彙学習方略使用の認識にどのような影響を及ぼすか，を明らかにすることである。1999年7月上旬に日本人EFL中学3年生174名と高校3年生149名を対象にGu and Johnson（1996）の語彙学習方略の一部を使用し，姉崎（1999）の語彙学習方略を修正した計48項目を用いて英語学習経験年数（中学生と高校生）の違いと性差が英語語彙学習方略に及ぼす影響を検討した。その結果，日本人中学生と高校生に特徴的な語彙学習方略として4因子が抽出された。さらにそのうち2因子（「文脈・反復重視」と「興味・嗜好優先」）の標準因子得点において英語学習経験年数と性別の交互作用が有意であった。また他の1因子（「単語のイメージ化」）においては，男女の違いによる影響があった。

KEY WORDS

vocabulary learning strategies	語彙学習方略	sex difference	性差
language learning experience	言語学習経験年数	factor analysis	因子分析

1．は　じ　め　に

近年，第2言語学習における語彙学習方略に関する関心が高まっている。日本人中学生を対象とした研究において，日本人中学3年生を対象にした姉崎（1999）では「類似性注目」「反復練習」「文中暗記」「学習順序決定」の4因子が報告され，辻川（1999）では，「集中して取り組む」「声に出して覚える」方略を最も多く使用した。平野（2000）では，「反復・体得重視」「単語のイメージ化」「興味・嗜好優先」「音声反復」の4因子が抽出された。また性差の影響もみられ，中学生では女性が「反復・体得重視」の方略使用を男性より強く意識しており，「興味・嗜好優先」では英語学力と性差の交互作用が有意であった。

一方，日本人高校生を対象にした研究においては，高校3年生の語彙学習方略を調べた堀野・市川（1997）では「体制化方略」「イメージ方略」「反復方略」が，また高校1，3年生を対象としたYabuki（2000）では，「単語習得努力」「類似性着目」「未知語調査」「未知語推測」「興

*　言語系教育講座
**　同志社大学
***　新潟県刈羽村立刈羽中学校

味語調査」「文脈重視意味選択」の6因子が報告されている。Yabukiは，性差の影響を受けた因子はこの6因子のうち「未知語調査」「未知語推測」「文脈重視意味選択」の3因子であり，いずれの因子においても女性が男性より多く使用していたと述べている。北條（2000）での，高3年生においては，「記憶術利用」「選択的単語暗記」「英文利用暗記」「既知情報利用」「意味調べ・暗記」の5因子が抽出されたが，方略の使用に性差の影響は見られなかった。

日本人以外の学習者を対象とした外国語・第2言語学習において，性差の影響を調べた研究として，Gardner and Lambert（1972）がある。彼らは，言語学習において女性が男性より動機が高く，目標言語を話す人に対してよりpositiveな態度を示したことを報告し，Nyikos（1990）は，ドイツ語の単語暗記タスクでは女性が男性より優れていたと述べている。他にBacon and Finnemann（1992）でもスペイン語学習で女性は男性より動機が高く，authentic inputを聞くときは男性はより局所的方略を，女性は全体的方略をより多く使用すると答えている。Ehrman & Oxford（1988），Oxford and Nyikos（1989）では5つの学習方略中3つにおいて女性が男性より使用頻度が高かった。また，中国人学生を対象にしたBoyle（1987）は，リスニングでの英語の語彙認識タスクでは男性の方が女性より成績がよかったが，その他の言語タスクでは，女性がまさっていたという結果を報告している。しかし，シンガポールのバイリンガル学習者を調査したWharton（2000）では意外なことに，全体的には性差の影響は見られなかった。さらに興味深いことに，あるタイプの言語学習方略項目では男性の方が女性より多くの方略を，より頻繁に使用していた。このように外国語・第2言語学習研究では，性差の影響が報告されている。

英語語彙学習方略の研究において，中学生と高校生の両方を対象にして，高校入試と大学入試を受けるまでの日本人学習者の英語語彙学習方略（特に記憶方略に焦点をあてた語彙学習方略）がどのような特徴をもっているかを調べ，中学生と高校生の方略の違いと性差による影響を検討する研究は言語学習・習得と4技能の指導，教材開発等において重要であり意義深い。

従って本研究の目的は，

1）日本人中学生と高校生の英語語彙学習方略使用に対する意識（認識）にはどのような特徴があるか，

2）語彙学習方略の使用に対する意識（認識）において中学生と高校生間に違いがあるか，及び性差の影響があるか，を明らかにすることである。

2．方　　法

2.1 対象者

計323名。内訳は新潟県内公立中学校3年生174名（中学校3校，5クラス）[1]。中学生男子84名，女子90名。年齢は14歳から15歳。半年以上の英語圏滞在者は一人もいなかった（ただし2ケ月の英語圏滞在者が7人，3ケ月から6ケ月の滞在者が2人いた）。また，高校生は東京都内の公立高校（トップレベルの都立高校1校，2クラス），及び長野県内公立高校（1校，3クラス。県内では学力が中の下のレベル）の3年生，計149名であった。高校生男子71名，女子78名。

2.2 アンケート

48項目（資料参照）から成る5段階尺度形式のアンケート（平野 2000）を使用した。このア

Table 1 Means and SDs for the Items on the Questionnaire (n=323)

項目	Mean	SD	項目	Mean	SD	項目	Mean	SD
▼ 1	2.24	1.36	17	2.52	1.28	33	2.23	1.08
▼ 2	1.37	0.81	18	2.34	1.25	▼ 34	1.80	0.98
3	2.86	1.39	19	2.35	1.25	▼ 35	1.78	1.02
▼ 4	1.56	1.08	20	2.87	1.29	▼ 36	2.13	1.18
▼ 5	1.16	0.48	21	2.39	1.26	37	2.32	1.28
6	3.38	1.36	22	2.39	1.19	▼ 38	1.65	0.93
▲ 7	4.00	1.20	▼ 23	1.93	1.08	▼ 39	1.86	1.12
8	3.07	1.34	24	3.06	1.28	▼ 40	1.85	1.08
▼ 9	1.70	1.01	25	3.27	1.42	▲ 41	3.90	1.20
▼ 10	1.39	0.77	26	2.26	1.19	42	3.31	1.37
▼ 11	1.37	0.85	27	2.39	1.32	▼ 43	1.72	1.07
▼ 12	1.65	1.06	28	2.68	1.36	▼ 44	1.72	1.17
13	2.74	1.38	29	2.16	1.13	▼ 45	1.99	1.23
14	2.34	1.33	30	2.44	1.25	46	3.24	1.43
▼ 15	2.03	1.13	31	2.21	1.17	47	2.81	1.39
▼ 16	2.16	1.33	32	3.02	1.32	48	2.30	1.14

▲は天井効果と判定された項目； ▼はフロア効果と判定された項目

ンケートは，筆者達の他に，研究協力者（高校教員）2名が参加して，主に Gu and Johnson (1996) に基づいて作成した姉崎（1999）の語彙学習方略に関するアンケート項目を修正したものである。本研究では48項目中，Gu and Johnson（1999）から40項目採用した。本研究では特に単語の記憶方略に焦点をあてているため，40項目の内訳は35項目の記憶方略（リハーサル方略11項目，記号化方略24項目）と5項目の活性化方略であり，さらに姉崎（1999）から，そのままか，修正して採用した8項目が含まれている。

回答は，最もあてはまっていると思うものを，5つ（1＝全くそうしていない，2＝あまりそうしていない，3＝どちらでもない，4＝ややそうしている，5＝全くそうしている）から1つ選ぶように指示した。

2.3 実施時期

計48項目から成る5段階尺度形式のアンケートは1999年6月下旬から7月上旬に実施した。

2.4 手続き

計48項目から成る5段階尺度形式のアンケートを実施した。所要時間は約20分であった。

2.5 分析方法

アンケートの英語彙単語学習方略に関する48項目への回答について，それぞれに，「全くそうしていない」を1点，［あまりそうしていない］を2点，「どちらでもない」を3点，「ややそう

Table 2 Factor Analysis Results (n=323)

Item No.	Factor Loading I	II	III	IV	Communalities
28	0.82				0.75
13	0.74				0.58
27	0.68				0.51
29	0.67				0.63
20		0.61			0.50
19		0.60			0.50
3		0.59			0.42
22		0.57			0.44
21		0.57			0.55
37		0.54			0.52
25		0.54			0.39
31			0.75		0.62
33			0.74		0.66
26			0.66		0.63
30			0.64		0.63
14			0.57		0.42
46				0.82	0.70
47				0.76	0.61
48				0.59	0.48
Eigenvalue	4.19	3.54	3.33	2.05	
Percent of variance explained (%)	16.12	13.60	12.79	7.89	

Note: Only items with loadings equal to or over 0.50 are indicated in the table.

している」を4点,「全くそうしている」を5点として得点化した。323名分の回答を因子分析にかけ，次に4因子の標準因子得点を分散分析にかけた。

3．結　　果

3.1 平均値と標準偏差

各項目の平均と標準偏差は表1のとおりであった。その結果48項目中，26項目において平均値±標準偏差の値が得点範囲（1－5）を越えなかったので，これらを因子分析にもち込んだ。その他の項目（計22項目）は，平均値＋標準偏差の値が5を越えて天井効果が生じたものと判断された項目（項目7，41）と，平均値－標準偏差の値が1以下で，フロア効果が生じたものと判断された項目（計20項目）であったので，因子分析に持ち込まなかった。

3.2 因子分析の結果

英語における語彙学習方略に関する48項目について，天井効果を示した項目2つ（項目7，41）と，フロア効果を示した20項目（項目1，2，4，5，9，10，11，12，15，16，23，34，35，36，38，39，40，43，44，45）の計22項目を削除した後の，26項目の得点について，共通

Table 3 Four Factors

Item	Loadings	Statement
Factor I（単語のイメージ化）		
28	0.82	新出単語を覚えるために，その単語のイメージを作り出す。
13	0.74	新出単語を覚えるために，その単語が意味するもの（こと）を頭に思い浮かべる（イメージ化する）。
27	0.68	身体の感覚と関連がある単語を覚える場合，その感覚を呼びおこして単語と結びつけて覚えようとする。（例えば，bitter＝「にがい」）
29	0.67	新出単語と，すでに知っている単語を関連づける時，二つを結びつけたイメージを作り出す。
Factor II（文脈・反復重視）		
20	0.61	出てきた文脈といっしょに新出単語を覚える。
19	0.60	単語を覚えようとするとき，その単語が使われている例文全体を覚える。
3	0.59	単語表（または単語帳）の単語が全部分かる位にまで，数回繰り返し学習して覚える。
22	0.57	話したり書いたりするとき，新しく覚えた単語をできるだけ使うようにする。
21	0.57	覚えた単語が使えるようになるために，できるだけたくさん英文を読もうとする。
37	0.54	自分自身で単語を文脈（句や文）の中に入れて覚えると，覚えやすい。
25	0.54	新しい単語を覚えるために，単語とその意味の両方を何度も書く。
Factor III（類似性着目）		
31	0.75	発音が似ている単語をいっしょに覚える。
33	0.74	新出単語と，すでに知っている単語の中で発音が似ているものを関連づける。
26	0.66	スペリングの一部が同じような新出単語群を，すでに知っている似たスペリングや発音の単語と関連づけて覚える。
30	0.64	新出単語と，すでに知っている単語の中で見た感じが似ているものを関連づける。
14	0.57	単語の文字をいくつかの部分に分けて，そのスペリングを覚える。
Factor IV（興味・嗜好優先）		
46	0.82	覚えやすそうな単語から覚えるようにする。
47	0.76	覚えたいと思う意味の単語から覚えるようにする。
48	0.59	具体的な単語（宇宙船，人々，戦車など）より抽象的な単語（宇宙，優しさ，戦争など）を先に覚えるようにする。

性の初期値を1として，主成分分析法を実行し，後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。その結果再度4因子解を仮定した主成分分析法を実行した。このとき4因子による累積説明率は50.40%であった。バリマクス回転後，絶対値.50以上の因子負荷量を示した項目は表2に示すとおりである。表2において因子負荷量の絶対値.50以上を示した項目の内容を中心にして各因子を解釈した（表3参照）。因子の解釈には筆者達3人と現職の中高英語教員（2人）が参加した。各因子で.50以上の負荷量を示した項目を表3にあげた。なお，詳細な検討のために，表4に各因子における項目の平均値と標準偏差を中学生，高校生ごとに示した。

因子Iには項目28，13，27，29の4項目が含まれていた。これらの項目の内容は，単語の意

Table 4 Means and SDs for the Items in Each Factor

Factor No.	Item No.	Junior High (n=174) Mean (SD)	Senior High (n=149) Mean (SD)	Total (n=323) Mean (SD)
Factor I	28	2.32 (1.29)	3.10 (1.31)	2.68 (1.36)
	13	2.44 (1.32)	3.09 (1.37)	2.74 (1.38)
	27	2.10 (1.23)	2.72 (1.35)	2.39 (1.32)
	29	1.86 (1.00)	2.51 (1.18)	2.16 (1.13)
Factor II	20	2.68 (1.31)	3.09 (1.23)	2.87 (1.29)
	19	2.21 (1.28)	2.51 (1.19)	2.35 (1.25)
	3	2.86 (1.44)	2.87 (1.33)	2.86 (1.39)
	22	2.51 (1.28)	2.26 (1.07)	2.39 (1.19)
	21	2.21 (1.25)	2.60 (1.25)	2.39 (1.26)
	37	2.11 (1.24)	2.55 (1.28)	2.32 (1.28)
	25	3.43 (1.35)	3.07 (1.48)	3.27 (1.42)
Factor III	31	2.04 (1.15)	2.40 (1.16)	2.21 (1.17)
	33	2.07 (1.11)	2.42 (1.01)	2.23 (1.08)
	26	1.98 (1.09)	2.59 (1.21)	2.26 (1.19)
	30	2.08 (1.13)	2.85 (1.25)	2.44 (1.25)
	14	2.25 (1.31)	2.44 (1.35)	2.34 (1.33)
Factor IV	46	3.44 (1.46)	3.02 (1.36)	3.24 (1.43)
	47	2.89 (1.45)	2.71 (1.32)	2.81 (1.39)
	48	2.25 (1.18)	2.35 (1.08)	2.30 (1.14)

味するもの（こと）を思い浮かべ，その単語のイメージを作り出して単語を覚えるというものであった。また身体の感覚と関連がある場合は，その感覚を呼びおこして覚えようとするというものも含まれていた。以上の項目に共通しているのは，単語を覚える際にイメージや感覚を利用しようとする姿勢であると考えられたので，因子Ｉは「単語のイメージ化」と命名した。

次に，因子IIには，項目20，19，3，22，21，37，25の７項目が含まれていた。これらの項目には大きく分けて二つの要素が含まれていた。まず，例文とともに単語を覚えたり，文脈の中で単語を覚えようとするものと，次に，何度も読んだり話したり書いたりして使いながら覚えようとするものの二つがあげられる。これらは一見全く関連がないように見えるが，学習者は反復練習の重要性を認識しながらも，それだけでは不十分と感じており，文や文脈とともに学習する必要性も同時に感じていることが推察される。以上から，因子IIは文脈を利用しながら，一方で語彙を積極的に反復し，学習しようとする態度であると推察されたので「文脈・反復重視」と命名した。

因子IIIには，項目31，33，26，30，14の計５項目が含まれていた。これらの項目内容を見ると，発音やスペリングの類似性に着目したり，すでに知っている単語と関連づけるものであった。このことから因子IIIは「類似性着目」と命名した。

因子IVには項目46，項目47，項目 48の計３項目が含まれていた。これらの項目内容をみると，覚えやすそうな単語や覚えたい意味の単語から覚えようとするものであった。因子IVは自

Table 5 Means and SDs on Factor Scores

	JuniorHigh (n=174)		SeniorHigh (n=149)	
	Male (n=84)	Female (n=90)	Male (n=71)	Female (n=78)
Factor No.	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)
I	-0.32 (0.85)	0.25 (0.99)	-0.46 (0.92)	0.47 (0.91)
II	-0.01 (0.88)	-0.02 (1.10)	-0.24 (0.97)	0.25 (0.94)
III	-0.09 (1.01)	0.19 (1.02)	-0.02 (1.00)	-0.10 (0.92)
IV	0.23 (1.02)	-0.28 (0.84)	0.06 (1.09)	0.01 (0.97)

Table 6 Results of Two-Way ANOVAs

Factor No.	Learning Experience (A)	Sex (B)	A x B	
	F	F	F	
I	0.17	52.01**	3.04	Female > Male**
II	0.03	4.69*	4.92*	Junior High----Male = Female Senior High----Female > Male**
III	0.91	0.87	2.62	
IV	0.30	6.52*	4.52*	Junior High---- Male > Female** Senior High---- Male = Female

*p<.05 **p<.01

分の興味や好みを優先して覚えようとする態度を表していると考えられたので，「興味・嗜好優先」と命名した。

3.3 標準因子得点に基づく分散分析の結果

次に抽出された4因子について，中学生と高校生の間に，また男女間に語彙学習方略使用に関する意識に差があるかどうかを検討するため，中学生と高校生について，性別ごとに各因子の標準因子得点を算出し，英語学習経験年数（中学生，高校生）x 性 （男性，女性）の2要因分散分析を行った。表5は中学生と高校生における男性・女性の各標準因子得点の平均と標準偏差を示したものである。 表6，表7，表8は4因子の2要因分散分析の結果を示した。

表6の分散分析の結果，英語学習経験年数と性別の交互作用が有意であったのは，第II因子（文脈・反復重視）（F (1,319)=4.92，p< .05）と第IV因子（興味・嗜好優先）（F (1，319)=4.52，p< .05）の2因子であった。そこで各水準ごとに単純主効果を分析した結果は，表7，8の示すとおりとなった。すなわち，第II因子（文脈・反復重視）では，中学では男=女，高校では女>男(p<.01)であった。第IV因子(興味・嗜好優先)を見ると，中学では男>女（p<.01)，高校では男=女であった。

Table 7 Results of two-way ANOVA for Factor II

S.V.	SS	df	MS	F
Learning Experience	0.0321	1	0.0321	0.03 ns
(Lg.Experience at Male	2.0299	1	2.0299	2.07 ns)
(Lg.Experience at Female	2.8170	1	2.8170	2.88 ns)
Sex	4.5920	1	4.5920	4.69*
(Sex at Jr.High	0.0013	1	0.0013	0.00 ns)
(Sex at Sr.High	9.4053	1	9.4053	9.61**)
Lg.Experience x Sex	4.8147	1	4.8147	4.92*
Sub	312.1931	319	0.9786	
Total	321.6320	322		

*p<.05 **p<.01

Table 8 Results of two-way ANOVA for Factor IV

S.V.	SS	df	MS	F
Learning Experience	0.2973	1	0.2973	0.30 ns
(Lg.Experience at Male	1.1970	1	1.1970	1.24 ns)
(Lg.Experience at Female	3.4791	1	3.4791	3.59 ns)
Sex	6.3182	1	6.3182	6.52*
(Sex at Jr.High	10.6084	1	10.6084	10.95**)
(Sex at Sr.High	0.0886	1	0.0886	0.09 ns)
Lg.Experience x Sex	4.3788	1	4.3788	4.52*
Sub	309.0345	319	0.9687	
Total	320.0289	322		

*p<.05 **p<.01

また第1因子(単語のイメージ化)では，性差の主効果があった($F(1,319)=52.01, p<.01$)。学習経験年数に関係なく，女性が男性より有意に高かった。

4. 考　　察

4.1 日本人中学生・高校生の英語語彙学習方略

それぞれの因子の解釈された内容は以下のようになった。

因子Ⅰ：単語のイメージ化

因子Ⅱ：文脈・反復重視

因子Ⅲ：類似性着目

因子Ⅳ：興味・嗜好優先

第Ⅰ因子 は「単語のイメージ化」と命名されたが，この「イメージ化方略」は，平野 (2000) が調査した中学生や，堀野・市川 (1997) における高校生でも重要因子として抽出されており，単語学習方略としての重要性の高さが伺える。

第II因子は，積極的に英文を利用して英文のなかで語彙を覚えようとする態度と，一方では語彙増強に要求される反復練習を好む日本人中学生・高校生のの語彙学習態度を表していると考えられる。平野（2000）で抽出された第1因子「反復・体得重視」と一部重複している項目がある。興味深いことに，一見相反するように見える項目が同一因子に抽出されたことは語彙学習方略の複雑さによるものかも知れない。なおこの因子のなかの[文脈重視]に関する項目は姉崎（1999）における中学生での「文中暗記」因子の4項目，北條（2000）での高校生に見出された「英文利用暗記」因子の項目の一部と内容が同じものである。またこの第II因子に含まれる「反復方略」の重要性もまた，日本人中学生を対象にした姉崎（1999），平野（2000）及び堀野・市川（1997）といった他の研究においても指摘されている。

第III因子（類似生着目）は姉崎（1999）や高校生を対象としたYabuki（2000）にも同じ名称の因子が報告されている。また北條（2000）における高校生の「既知情報利用」因子のなかの項目とも重なっている。類似性に注目し既習事項を活用して効率的に学習を進めようとすることは，人間の認知システムから考えると当然のことと言えよう。

第IV因子である，単語を覚えるときに，興味や自分の好みを優先にして単語を覚える「興味・嗜好優先」方略は，姉崎（1999）や平野（2000）において，その重要性が指摘されている。

上記の3因子（第I，II，IV因子）とは対照的に，中学生を対象とした平野（2000）の研究で抽出された「音声反復」因子は，本研究では抽出されなかった。このような相違について詳細な分析をすることは本研究では困難であるが，中学校では音読活動やオーラルコミュニケーションが重視されているが，高校になると中学校ほど重視されなくなるので，中学生と高校生の両方を対象とした本研究では，この因子が抽出されなかったのかもしれない。

4.2 語彙学習方略における英語学習経験年数と性差の影響

第I，第III因子を除いた他の2つの因子（第II，IV因子）では，英語学習経験年数と性差の交互作用が有意であり，語彙学習方略の使用に対する意識が英語学習経験年数や性差によって異なることがわかった。例えば，第II因子の「文脈・反復重視」が示すように，高校生の場合，男子よりも女子の方が，文脈を利用したり，反復して学習する方法をとると答えた者が多かった。一方，中学生の場合，高校生に見られた著しい男女の差は見られなかった。このことから，中学生より高い英語学力を有する高校生の学習者では，女子は男子に比べて語彙の長期記憶をはかるために，積極的に語彙を反復練習したり，文脈を利用しながら覚えようとしていることがうかがえる。このような中学生と高校生の相違の原因を明確に指摘することは困難であるが，中学までは男女ともに意識して，文脈・反復重視の語彙学習を行っているのに対し，高校に入ると男子は女子に比べて意識して単語を書いたり英文を読んで覚えたりする練習をしなくなると考えられる。したがって，高校の男子に対しては，このような何度も繰り返す練習や様々な文章を読みながら語彙を増やす方略を意識的に使うように指導することが必要であると言えるであろう。しかしながら，これらの英語学習経験年数や性差が単語学習方略に及ぼす影響については，さらに詳しく調べる必要があると思われる。

第IV因子の「興味・嗜好優先」においても，英語学週経験年数と性別の有意な交互作用がみられた。すなわち，高校生では，性差によって語彙学習方略の使用が異なるということはなかったが，中学生では，性差の影響がみられ，男子が女子より興味や嗜好によって，単語の学習順位を決めていた。これは，中学生男子が工夫して学習しているように解釈する事も可能である

が，一方で，好きな単語や覚えやすい単語から覚え，最初から学習範囲の単語すべてを覚えようとはしないことを示唆していると考えることも可能である。すなわち，中学生の場合女子は，学習対象の単語すべてを覚えようと努めるのに対し，男子は，最初からすべての単語を覚えようとするのではなく，覚えられそうな単語から学習しようとするのかもしれない。なお，平野(2000) では英語学力の影響が報告されている。すなわち，この「興味・嗜好優先」因子では，英語学力と性差の有意な交互作用が中学生に見出され，学力中位群で男子が女子より興味・嗜好優先で単語を覚えると答えていた。

第Ⅰ因子「単語のイメージ化」について，平野 (2000) は中学生の場合英語学力の影響はあったが，男女差はみられなかったことを報告しているが，日本人中学生・高校生の両方を扱った本研究では，英語学習経験年数に関係なく，全体において，男子より女子が単語のイメージにたよって記憶する方略をとると答えた者が有意に多かった。

5．おわりに

本研究の結果は次のとおりである。1）日本人中学生と高校生全体の英語の語彙学習方略(主に語彙記憶方略）に関して4因子が抽出された。2）4因子のうち2因子（第IIと第IV因子）に対する認識の程度が英語学習経験年数と男女の違いによって異なった。また第Ⅰ因子（単語のイメージ化）では英語学習経験年数に関係なく全体に男女の差があった。

今後の課題が幾つかある。a)被験者を増やすことが必要である。また，中学生，高校生，大学生において b）英語学習経験年数の違いと性差が語彙学習方略使用に及ぼす影響，c）語彙力や文法力，また読解力，英作文力，文字と音声によるコミュニケーション能力と語彙学習方略使用の関係，d)教師の指導が学習者の語彙学習方略の使用に及ぼす影響，等を検討する必要がある。

謝　　辞

本研究のアンケート作成と調査依頼に協力を頂いた中村洋一氏と飛田牧弘氏に深く感謝します。

1）平野（2000）と同じ対象者。

引用文献

姉崎達夫. 1999.「日本人EFL学習者における読解方略における一考察」『上越教育大学大学院学校教育研究科言語系コース（英語）研究論集』, 14, 19-34.

Bacon, S. and Finnemann, M. 1992. Sex differences in self-reported beliefs about foreign language learning and authentic oral and written input. *Language Learning,* 42, 471-495.

Boyle, J.P. 1987. Sex differences in listening vocabulary. *Language Learning,* 37, 273-284.

Ehrman, M. and Oxford, R.1988. Effects of sex differences, career choice, and psychologi-

cal type on adult language learning strategies. *The Modern Language Journal,* 72, 253-265.

Gardner, R. C. and Lambert, W.E. 1972. *Attitudes and motivation in second-language learning.* Rowley, Mass.: Newbury House Publishers.

Gu, Y. , and Johnson, R.K. 1996. Vocabulary learning strategies and language learning outcomes. *Language Learning,* 46, 4, 643-679.

平野絹枝. 2000.「日本人 EFL 中学生の英語語彙学習方略――英語学力と性差の影響――」『上越教育大学研究紀要』第19巻 第2号, 719-731.

北條礼子. 2000.「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究 (9) :語彙学習方略と関連諸要因との関係について」『上越教育大学研究紀要』第20巻 第1号, 177-189.

堀野 緑, 市川伸一. 1997.「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」『教育心理学研究』, 45, 140-147.

Nyikos, M. 1990. Sex-related differences in adult language learning: socialization and memory factors. *The Modern Language Journal,* 74, 273-287.

Oxford, R. and Nyikos, M. 1989. Variables affecting choice of language learning strategies by university students. *The Modern Language Journal,* 73, 291-300.

辻川陽子. 1999.「第2言語の語彙学習におけるグルーピングの効果に関する一考察」『上越教育大学大学院学校教育研究科言語系コース (英語) 研究論集』, 14, 99-114.

Wharton, G. 2000. Language learning strategy use of bilingual foreign language learners in Singapore. *Language Learning,* 50, 203-243.

Yabuki, Y. 2000. A study of the correlations of learner characteristics and vocabulary level with vocabulary learning strategies of Japanese EFL high school students. *Unpublished MA thesis,* Joetsu University of Education.

資　　料

1 新しく出てきた単語を一覧表 (単語表) または単語帳にまとめて覚える
2 自分で作った単語の一覧表 (または単語帳) をいつも持ち歩く。
3 単語表 (または単語帳) の単語が全部分かる位にまで, 数回繰り返し学習して覚える。
4 単語カードを使って表に単語, 裏に意味を書いて覚える。
5 単語カードを作り, どこへ行くにもそれを持っていく。
6 単語を覚えようとするとき, 実際に声を出して繰り返して発音してみる。
7 単語を覚えようとするとき, 私は何度もその単語を書く。
8 単語のスペリング (つづり) を一文字ずつ確認してから覚える。
9 つづりの一部が似ている新出単語をひとつのグループとしてまとめて覚える。
10 新しい単語とすでに知っている単語を結びつけて覚えるために, 日本語で例文を作る。
11 単語をよく覚えるために実際に動作で表現する。
12 単語を覚えるために, 単語の文字の一つか二つと単語の意味を関連づける (例えば, look の真ん中に二つの目がある)。
13 新出単語を覚えるために, その単語が意味するもの (こと) を頭に思い浮かべる (イメージ化する)。

14 単語の文字をいくつかの部分に分けて，そのスペリングを覚える。
15 スペリング全体が同じような単語をいっしょに覚える。
16 覚えようとする単語を接頭辞，語幹，接尾辞に分析する。
※接頭辞＝単語の最初に来る部分（例：unhappy の un）
※語幹　＝単語の意味の中心部分（例：unhappy の happy）
※接尾辞＝単語の最後に来る部分（例：happiness の ness）
17 一般的によく使われる語幹や接頭辞を覚える。
18 新しい単語を学習するとき，今まで自分の知っている単語の中に反意語があるかどうか考える。
19 単語を覚えようとするとき，その単語が使われている例文全体を覚える
20 出てきた文脈といっしょに新出単語を覚える。
21 覚えた単語が使えるようになるために，できるだけたくさん英文を読もうとする。
22 話したり書いたりするとき，新しく覚えた単語をできるだけ使うようにする。
23 自分が覚えた単語を定期的に計画的に復習する。
24 新しい単語を一人で繰り返し発音すれば，その単語を覚えることができる。
25 新しい単語を覚えるために，単語とその意味の両方を何度も書く。
26 スペリングの一部が同じような新出単語群を，すでに知っている似たスペリングや発音の単語と関連づけて覚える。
27 身体の感覚と関連がある単語を覚える場合，その感覚を呼びおこして単語と結びつけて覚えようとする。(例えば，　bitter ＝ 「にがい」)
28 新出単語を覚えるために，その単語のイメージを作り出す。
29 新出単語と，すでに知っている単語を関連づける時，二つを結びつけたイメージを作り出す。
30 新出単語と，すでに知っている単語の中で見た感じが似ているものを関連づける。
31 発音が似ている単語をいっしょに覚える。
32 多くの単語を覚えるために，単語形成の規則を勉強しようとする（例:動詞に-er をつけると，「...する人を意味するようになる。play → player)。
33 新出単語と，すでに知っている単語の中で発音が似ているものを関連づける。
34 互いに関連する意味の単語をまとめて覚える。(例えば，「消しゴム」「鉛筆」「筆箱」「ものさし」を一緒にまとめて覚える)。
35 単語を「種類」ごとに分類して覚える。(例えば，動物，家庭用品，野菜など)。
36 自分が興味をもっている分野の英文をすすんで読んで，日本語で知っている専門的な言葉に相当する英語を覚えようとする。
37 自分自身で単語を文脈（句や文）の中に入れて覚えると，覚えやすい。
38 覚えたばかりの単語を使って自分なりの文を作る。
39 新しく学習した単語を頭の中で空想した場面で使おうとする。
40 新しく学習した単語を実際の場面で使おうとする。
41 試験勉強のために単語，熟語を暗記する。
42 辞書を引いて単語を覚える。
43 単語クイズを作って，友達と出し合って覚える。
44 教科書用 CD やカセットを繰り返し聞いて単語を覚える。
45 単語を書いたり発音したりしないで，ただじっと見て覚える

46 覚えやすそうな単語から覚えるようにする。
47 覚えたいと思う意味の単語から覚えるようにする。
48 具体的な単語（宇宙船，人々，戦車など）より抽象的な単語（宇宙，優しさ，戦争など）を先に覚えるようにする。

The Effects of Language Learning Experience and Sex Difference on Vocabulary Learning Strategies: Japanese Junior and Senior High School Students

Kinue HIRANO*, Nobuhiko AKAMATSU**and Tatsuo ANEZAKI***

ABSTRACT

This study investigates Japanese junior high school and senior high school students' awareness of their vocabulary learning strategies to explore the effects of language learning experience and sex difference on their awareness or perceptions of their vocabulary learning strategies. The participants consisted of 174 Japanese junior high school students and 149 senior high school students. Using a five-point Likert Scale (1 = strongly disagree, 5 = strongly agree), the students judged forty-eight statements about their own perceived vocabulary learning strategies in June and July, 1999.

The results revealed that four factors of vocabulary learning strategies were extracted through factor analysis. The results of ANOVAs on factor scores indicated that significant interactions were found betweeen language learning experience and sex difference for Factors II and IV. Factor I was affected by sex difference.

* Division of Languages: Department of Foreign Languages
** Doshisha University
*** Kariwa Junior High School, Niigata-ken